

友松対談 ⑬

川崎市友松会

星野会長に現状を聞く

川崎市友松会とは何か、支部とはどう違うのか。



星野 仁氏 近影

語り手 川崎市友松会長 星野 仁 (昭和36年卒)
聞き手 友松会弘報部 黒川 鈴谷 (昭和35年卒)

昨年の10月に横須賀友松会(友松会横須賀支部)をお訪ねして、その活動の様子をお聞きしました。その後、川崎にも「川崎市友松会」があるということを知って、その活動の様子を知りたいと思いました。今回その希望が実現して、川崎市友松会会長の星野 仁さんにお話を伺うことができました。以下が、その時の対談の記録です。(H.26.6.19)

- 黒川 本日はご多忙のところ、わざわざ横浜までお出かけ下さいましてありがとうございます。実は今日星野さんから伺う予定の「川崎市友松会」のことを聞いたのは、中原支部長の田中康之さんからなのです。中原支部の話を知ろうと思って田中さんに電話したのですが、結局断られてしまった。でも電話で40分近く喋っているうちに、私が「横須賀友松会の活動はすごい」と言いましたら、「川崎にも川崎市友松会がある」ということで、会長である先生のお名前を覚えてもらったのです。
- 星野 田中さんが話してくれれば、一番良かったのですがね。
- 黒川 星野さんは田中さんと同期生ですね。田中さんは国語科ですが、あなたは専攻は何だったのですか。
- 星野 私は社会科です。
- 黒川 星野さん・田中さんは昭和36年卒業で私は35年卒業ですから、国大在学中に鎌倉の学内の何処かですれちがっているはずなのですが、師範の時代と違って学科が違くとサークルなどで一緒に活動しない限り、同学年でもほとんど知りません。専門課程になると、教室や研究室での接触はほぼ同じ学科の学生に限られますからね。これは大学時代と師範時代との大きな違いだと思います。
- ところで話を元に戻しますが、横須賀の場合は「横須賀友松会」と言っても、実態は「友松会横須賀支部」なのですね。川崎はどうもそれとは違うらしいのですが。
- 星野 川崎の場合は川崎ブロックの中に7支部あり、川崎市友松会はそれらの支部とは別個の存在です。つまり川崎市友松会というのは、友松会傘下の組織ではないのです。
- 黒川 伺っていてもどうも話が良く分かりません。川崎も元は現在の横須賀と同様に、全市が一つの支部だったと聞いているのですが。
- 星野 そうです。もとは川崎市全体が、一つの川崎支部でした。今でも川崎支部はありますが、それは川崎市川崎区にある支部で、昔のように川崎全市を領域とするものではありません。



川崎市街遠望

黒川 その広い川崎支部が現在のように7支部に分かれたのは、政令指定都市になって区制が敷かれたからですか。

星野 昭和47年に区制が敷かれて川崎区・幸区・中原区・高津区・多摩区の5つの区が出来たのですが、この時にすぐ支部が分かれたのではありません。10年後の昭和57年に区の再編成があり、多摩区が多摩区と麻生区に分かれ、高津区が高津区と宮前区に分かれて7区になりました。

黒川 そうですか。ではその時に7支部に分かれたのですね。

星野 いやそうではなくて、7区に分かれてから更に数年してちょうど昭和が終わった平成元年に、7支部にしようと言うことになったのです。

黒川 私は今お話を聞くまでは、川崎が7支部に分かれたのは政令指定都市となったことによる区制の施行という、言わば外的要因によるものだと思っていたのですが、そうではないのですね。では考えられるもう一つの外的要因、つまり県友松会からの何らかの働きかけ、例えば「川崎も各区ごとの支部に再編成したらどうか」と言うような勧告があったのですか。

星野 いや、そんなことは全くありませんでした。川崎の友松会員の意思です。

黒川 ではいったい何が原因で1つだったものが7つに分かれたのですか。そう言えば田中さんからチラッと聞いたのですが、



川崎市を構成する7つの区

7つに分かれる時に「もともと1つにまとまっているものを、何故バラバラに分けるのだ」というOBの反対がかなり強かったとのことですね。

星野 私も当時はまだ若手の方だったので、あまり詳しいいきさつは知りません。先輩の話によると、「各区がそれぞれ支部となる7支部にした方が良いのではないか。横浜も各区ごとの支部になっているし。」ということでした。でもそういう表面的な理由とは別に、もっと根本的な理由があったと思います。

黒川 それはいったいどんなことなのですか。

星野 当時の先輩たちの主張では、一本にまとまっている川崎の友松会を、いまさら分ける必要は無いだろうということなのです。しかしその頃の川崎の友松会は我々若手から見ると師範卒の年配者の集まりで、若い人が参加しない又は参加しにくい傾向がありました。

黒川 若い人が参加しないのは何故だったのですか。何となくわかる気もしますが。

星野 やっぱ若い人は先輩が煙たいからね。年寄りが牛耳っているところへ若い者が行ったっておもしろくない。することもないし、第一やらせてもくれないから。ところが今まで一つだった支部が7つになれば、例えば支部長だって1人だったのが7人になるし、今まで活躍の場がなかった若手が活躍する場が出来る訳ですよ。一つだった川崎が7つの支部に分かれたことの、これが本当の理由です。

黒川 成る程、だんだんと分かってきました。

星野 この問題は当時の若い会員が友松会の運営に何とか協力していきたいという純粋な気持ちを、先輩たちがうまく汲み取って活用できなかったということでしょう。

黒川 すると支部の組織とは別に、「川崎市友松会」という組織を作ったのは、7分割することに反対のOBの気持ちをなだめる為という側面があるのですね。それはそれで、川崎の友松会の団結を守るために必要だったと理解は出来ますが。

星野 確かにそういう面はあります。しかしそれだけでなく、あくまでも川崎は一枚岩だと言うことを示すため川崎市友松会を作ったのです。

黒川 今までのお話を伺って、一つだった川崎支部を先輩諸氏の反対を押し切って7支部にしたのは、マンネリを排して友松会の活動の活性化を図るためだったということは理解出来ました。どんな組織でも現状に甘んずることなく、将来を見通して変革していくことは大事ですからね。ところで7支部に分かれている現在の川崎の各支部の、活動状況についてお聞きしたいのですがもちろん支部総会も7支部が各自でやるわけですね。

星野 そうです。支部総会は県の総会前に、5月にやるところも有ります。夏休み中か9月が多いですが、一番遅い支部で10月頃です。内容は大きく分けて総会と研修と懇親会です。総会の内容や懇親会はどこも同じようなものです。研修は講師を頼んで講演をしてもらいます。ただ費用の点で大変なので講師は身内の会員から選び、例えば美術に堪能な人がいたら美術の話をしてもらい、旅行が好きな人には海外旅行に行った時の話をしてもらうというように、その人の得意な事の話をしてもらいます。ただ支部の会員の中にそういう人がいない場合には困ってしまい、最近はやむを得ず研修を省いた総会もあります。



川崎市宮前区を空より望む

黒川 支部の総会は何曜日にやりますか。

星野 川崎市友松会の総会は土曜日か日曜日にやりますが、支部総会は特に決まってはいません。

黒川 昨年度の川崎市友松会の総会は何月でしたか。

星野 各支部の総会が終わってからやるので、日程的にはどうしても遅くなります。25年度の総会は今年の2月に予定していたのですが、その日にあいにく大雪になり流会となってしまいました。ですから26年度は少し早めに9月ころにはやる予定です。

黒川 横浜では支部長は全員が現職の校長なのですが、川崎では支部長はOBですね。

星野 現在は何の支部も支部長はOBがやり、支部の事務局の仕事は現職の校長が勤めるという体制になっています。私は平成3年に末長小の校長の時、初めて高津支部の事務局を仰せつかったのですが、その頃は支部長と事務局の役割分担がはっきりせず、現職の校長が支部長のところもありました。平成10年頃に支部長はOB、事務局は現職の校長が勤めることになりました。

黒川 そのように決まった理由は何ですか。

星野 支部長の仕事をするには、時間に余裕のあるOBの方が良い。一方で校内会員の情報をつかみやすい現職の校長の方が事務局としては適当だろうということです。



東京湾上空より川崎を見る

- 黒川 もともと一つだった支部を7つの支部に分けた当初の狙いは良く分かりましたが、その狙いは現在でも有効に働いていますか。
- 星野 当初のその狙いは、初めのうちはとても良く実現しました。支部が小さく分かれ会員の数も少なくなった結果、支部のメンバー相互の親密度が増し活動に活気がでました。だが残念ながら、7支部発足当時の良好な状態が現在まで続いているとは言えません。
- 黒川 それはまた何故ですか。
- 星野 7支部に分かれた平成初年頃にはほとんど予測出来なかったのですが、当時と比べて現在の会員数の減少が予想以上だからです。最近では、川崎全体で国大の卒業生は10人くらいしか入ってきません。ですから近頃は、川崎は7支部に分かれているよりも、初めのように1つに纏まっている方が良いのでは、と言う人もいます。
- 黒川 現時点では、7支部に分かれていることのデメリットとして、何が考えられますか。
- 星野 会員数は減少し、必然的に支部の構成員の人数も減ってきているのに、分担して処理する支部の仕事は変わらない。現行ではそれだけ実際に仕事をする人の負担が増えて支部総会を開くことも大変です。だから昔のように川崎市一本でやれば良いという意見も有ります。
- 黒川 仕事の負担を考えれば、当然そういう意見も出てくるでしょうね。
- 星野 ところが現在の7支部を残してほしい、残すべきだという意見もあります。
- 黒川 会員数の減少による支部運営の困難さという話が出ましたが、横浜も同じ悩みを抱えています。横浜も分区による区の数で支部の数が増加し、現在18支部あります。
- 星野 支部の運営が難しくなっているのは、若い会員の友松会に対する気持の変化も有ると思います。私達の若いときも、友松会に対する気持は先輩諸氏と比べてギャップがありました。それは当然のことで、友松会に懐かしさを感じたのは退職が近くなったり、退職してから何年かたってからです。しかし今の若い人の無関心は私達の頃の無関心とちょっと違う。今の人の無関心は、「意識して拒否する」という種類の無関心で、時間の経過とともにやがて関心を持つようになるという我々の若い時の無関心とは違うように思います。
- 黒川 うーん、そうかも知れませんね。今の若い人は「組織に所属する」ということに対する拒否反応があるのかもしれない。
- 星野 せめて国大当局が卒業の時に卒業生に、「君たちは友松会という同窓会に所属するのだ」と言ってくれれば良いのですがね。
- 黒川 国大全学部の卒業生を統括する同窓会組織ができるそうですし、その中で友松会はどういう存在となるのか、なかなか難しいですね。もともと友松会は師範学校時代に出来たもので、その時代の組織としてはとても良く出来ていました。しかし時代は移って情勢は変わっているのに、昔のままの組織で居ることに無理があると思います。
- 今日はいろいろお話を伺って、川崎市友松会のこと良く分かりました。これからの友松会はいろいろ大変な問題をかかえています。横浜の支部も川崎の支部も県下の他の支部も手を携えて、問題を乗り切っていければ良いと思います。
- 本日はどうもありがとうございました。